

【審査論文】

和歌における「鶴」——高内侍と西行の和歌を繋ぐもの——

木村 尚志

The crane as a symbol in waka poetry.

— Connecting Kononaiishi's waka and Saigyô's waka. —

Takashi KIMURA

要旨

歌語「夜の鶴」は『和漢朗詠集』の「第三第四絃冷々 夜鶴憶子籠中鳴」(管絃・五絃弾・白居易)に基づく。高内侍は長子伊周(これちか)が流罪となった時に、病に倒れ「夜の鶴都のうちに籠められて子を恋ひつつもなきあかすかな」(栄花物語・浦々の別れ)と詠んだ。百七十年後、源平の合戦に敗れ捕虜となった平家の武将平宗盛とその子清宗は、鎌倉へ向かった後、京都へ送還され、近江国篠原宿で斬首された。宗盛が清宗のことを思って泣いていたと聞いた西行は、「夜の鶴都のうちをいでてあれな子の思ひには惑はざらまし」(西行法師家集)と詠んだ。二首ともに「都のうち」に五絃弾の詩から取った「籠の中」という言葉を掛けて「夜の鶴」の縁語として詠み込み、そして栄枯盛衰の時代状況の中で生まれたものである。本稿では鶴という歌語全体の性質にまで視野を広げつつ、このような「夜の鶴」にまつわる逸話が後の時代の歌語「鶴」の展開にどのように関与するのかを家の意識等にも着目しつつ考察する。

キーワード: 「夜の鶴」・“A crane of the night” 高内侍・Kononaiishi 西行・Saigyô 訴嘆・An appeal made to a person of superior status or rank

院政期・The cloister government period

一 はじめに

中唐の詩人白居易(七七二―八四六)の『白氏文集』は九世紀半ばに日本に伝来し、わが国の平安文学に多大な影響を与えた。同書の新楽府しんがふ「五絃弾」

は、五絃琴の各絃の音について歌ったものであり、藤原公任撰の『和漢朗詠集』の「管絃」に選り入れられたことで広く人口に膾炙した。

第一第二の絃は索々くさくさたり 秋の風松を払つて疎音落つそおん(の)おち

第三第四の絃は冷々れいれいたり 夜の鶴子を憶うて籠の中に鳴くおも うち

第五の絃の声はもつとも掩抑せり 隴水凍り咽んで流ること得ず

本稿では右の傍線部の詩句の和歌への影響について論じたい。「夜の鶴」という成語は、鶏は夜明けを知って鳴き、鶴は夜半を知って鳴くものとされる(淮南子・説山訓)ことから来ている。例えば『和漢朗詠集』の「鶴」には、
源順の詩、

漢に叫んでは 遙かに孤枕の夢を驚かす

風に和しては 漫りがはしく五絃弾に入る (訓は古訓に拠る)

が見える。夜半に鳴く鶴の声が一人寝の夢を覚まし、その声は風と響き合って五絃琴をかき鳴らすように聞こえる、という内容である。では歌語としての「夜の鶴」はいかにして誕生し、後世に継承されたのであろうか。「五絃弾」には「子を憶うて」という言葉がある。誕生した子の長寿を祈り、家の繁栄を言祝ぐ賀歌に用いられることの多い「鶴の子」という歌語もあるため、鶴と子は觀念上強く結びつくものであった。

孫の幼きを周防内侍見侍りてのち、鶴の子の千代のけし
きを思ひいづる由いひにおこせて侍りける返しにつかはし
ける

おもひやれまだ鶴の子の生ひさを千代もとなづる袖の狭さを

(後拾遺和歌集・賀・四四四・藤三位(藤原親子))

正月一日子産みたる人に襦袢つかはすとてよめる

珍しく今日たちそむる鶴の子は千代のむつきを重ぬべきかな

(詞花和歌集・賀・一六二・伊勢大輔)

貞永元年六月、后の宮の御方にて、はじめて鶴契退年と

いふ題を講ぜられ侍りけるに

鶴の子の又やしはこの末までも古きためしをわが世とや見む

(新勅撰和歌集・賀・四四三・藤原道家)

このように「鶴の子」が祝賀性の強い歌語であるのに対して、「夜の鶴」は子を思う親の心情を述懐する漢籍由来の歌語である。この「夜の鶴」の用例と表現内容について、まずは摂関政治全盛時代における中関白家の没落を背景とした一首の歌から見ていきたい。

二 高内侍の歌

夜の鶴都のうちに籠められて子を恋ひつつも鳴きあかす哉

これは『栄花物語』に見える高内侍(高階貴子・儀同三司母、?—九九六)の歌である。中関白藤原道隆の北の方で、伊周・隆家・中宮定子を生んだ高内侍は、中関白家の栄華と凋落を目の当たりにした人物である。長徳二年(九九六)、花山法皇を射奉った事、東三条女院を呪詛し奉った事、私的に大元帥法を行った事の三箇条の罪状により、伊周は大宰権帥、隆家は出雲権帥として流されることが決定した。出発の当日、定子・母北の方(高内侍)・伊周の三人は固く手を取り合ったまま離れようとしなかった。『栄花物語』から、それに続く場面を引用する。

はかなくて夜も明けぬれば、「今日こそは限」と誰々もおぼすに、立ちのかんとも覺さず、御声も惜しませ給はず。「いかにく、時なりぬ」とせめのゝしるに、宮の御前、母北方、つとらへて、さらにゆるし奉らせ給はず。かゝる由を奏せさすれば、「几帳ごしに宮の御前をひき放ち奉れ」と宣旨頻れど、検非違使ども、人なれば、おはします屋にはえもいはぬ物共も上りたちて、塗籠をわりのゝしるだにいみじきを、又「いかでか宮の御前の手をひきはなつ事はあらむ」と、いと恐しく思ひまはして、「身のいたづらにまかりなりて後は、いとびんなかるべし。とくく」とせめ申せば、ずちなくて出でさせ給に、松君(伊周男道雅の幼

名、木村注) いみじう慕ひ聞え給へば、かしこくかまへて率てかくし奉りて、御車に柑子・たち花、かきほをある御ごき一ばかり御餌袋に入れて、中納言は筵張の車に乗り給。宮のおはしますをいとかたじけなく覺せど、宮の御前、母北方も続きたち給へれば、近う御車寄せて乗らせ給に、母北方やがて御腰を抱きて続き乗らせ給へば、「母北方、帥の袖をつとらへて乗らむと侍」と奏せさすれば、「いとびんなき事也。ひき放ちて」とあれど、離れ給べきかた見えず。「たゞ山崎まで行かむく」とたゞ乗りに乗り給へば、如何はせん、ずちなくて御車引き出しつ。長徳二年四月廿四日なりけり。

中関白家の凋落を悲しむ余りに、我を忘れて伊周の腰に取り付く高内侍の姿が描かれている。そして、精神的な痛手を負った彼女は病に伏し沈んでしまう。

北方は其まゝに御心地あしうて、物もまいらで、年ごろの御念誦も懈怠して、あはれに口惜き御有様を、御はらからの清照阿闍梨など明暮聞ゆれど、今は覺し直るべきやうも見えず、沈み入ておはすれば、いかにと心細きを、宮の御前にも御方くにも覺し歎く。二位新発(高内侍の父高階成忠、木村注)はたゆみなき御祈の験、さりとともくと思へし。いづくにも其まゝに皆御齋にて、朝くれ仏を念じ奉り。かしこに通ふ御文のうちの言葉ども、いづれもあはれに悲しき(に)、この北方は沈み入り給て、いと頼しげなく(なり)まさらせ給。たゞ世と共の御言には、「殿に對面して死なむく」とぞ寝言にもし給。帥殿(子息伊周、木村注)をかく聞え給なるべし。「世はかなければ、かく覺しつゝ(と)もかくもおはせむは、いみじき事かな」と、この主達の聞ゆるに、「さりとていかゞはあるべからむ」とて、九月十日の程になりぬれば、宮の御事(中宮定子の御産、木村注)もやうく近く成ぬるに、頼しう覺す人の

沈み入り給へるに、いと心細く覺さるゝ事つきせずなん。この御心地の有様、おこたり給はむ事あり難げなるに、たゞ明暮は、「あな恋し」よりほかの事をの給はゞこそあらめ。是を聞給まゝに、但馬にも播磨にもいみじう覺し遣す。母北方うち泣き給ひて、

夜の鶴都のうちに籠められて子を恋つゝも鳴あかす哉。「いかに」と人く聞ゆれば、「あらず」と言ひ紛はし給へり。

間もなく病は危篤となり、一〇月二〇日余りに亡くなつたと『栄花物語』は伝えている。この歌を詠んだ場面で、人々に涙の訳を尋ねられて「あらず(何でもなし)」と言ひ紛らわしたところには、教養のある女性として子への情愛に理性を失うほどに囚われる自分を恥じ入る気持ちが見られるのかもしれない。この歌は、白居易の詩に由来する「夜の鶴」という歌語を初めて和歌に詠み込んだ、和漢の才に富んだ彼女ならではの絶唱となった。そして院政末期に、藤原顕輔撰の『詞花和歌集』、及び『詞花和歌集』を難する書として寂超の撰んだ『後葉和歌集』に入集している(前者は「こ」の字の繰り返しを避けるためか、第三句を「はなたれて」に作る)。

三 平宗盛の逸話

平宗盛(一一四七—一一八五)は元暦二年(一一八五)三月二四日、壇ノ浦の戦いで平家が滅亡した際に捕虜となり、鎌倉に迎えられて再び京へ向かう途次、近江国において親子とも処刑された。

この一報を聞いた西行(一一一八—一一九〇)は、次の和歌を詠んだ。
八島内府鎌倉に迎へられて、京へ又送られ給ひけり。武士の母のことはさることにて、右衛門督のことを思ふにぞとて、泣き給ひけると聞きて

夜の鶴の都のうちを出でてあれなこのおもひにはまどはざらまし

(西行法師家集・四三五)

右衛門督は清宗のこと。「夜の鶴」は宗盛の亡魂であり、「都のうち」に五絃弾中の言葉「籠の中」を掛ける。解釈には諸説あるが、稿者は、宗盛の亡魂よ、都のうちは「子を憶うて籠の中に鳴く」とされる「籠の中」と同じであるから、あなたは都のうちを出て行かなければならない、そうすれば子への思いに惑って、往生を妨げられることもないであろう、と解する。

この事件の経緯を覚一本『平家物語』によって示しておきたい。

さる程に、九郎大夫判官やうくに陳じ申されけれども、景時が讒言によつて、鎌倉殿さらに分明の御返事もなし。「いそぎのぼらるべし」と仰せられければ、同六月九日、大臣殿父子具し奉つて、都へぞかへりのぼられける。大臣殿は今すこしも日数ののぶるをうれしき事に思はれけり。道すがら、「ここにてや、ここにてや」とおぼしけれども、国々宿々うち過ぎうち過ぎとほりぬ。(中略)

日数ふれば都もちかづきて、近江国篠原の宿につき給ひぬ。判官なさけふかき人なれば、三日路より人を先だてて、善知識のために、大原の本性坊湛豪といふ聖を請じ下されたり。昨日までは親子一所におはしけるを、今朝よりひきはなつて、別の所にすゑ奉りければ、「さては今日を最後にてあるやらん」と、いとど心ぼそうぞ思はれける。大臣殿涙をはらくとながいて、「そもく右衛門督はいづくに候やらん。手をとりにくんでも終り、たとひ頸はおつとも、むくろは一つ席にふさんところぞ思ひつるに、いきながらわかれぬる事こそかなしけれ。十七年が間、一日片時もはなる事なし。海底に沈んで、うき名をながすも、あれゆゑなり」とて泣かれければ、聖もあはれに思ひけれども、我さへ心よわくてはかなはじと思ひて、涙おしのごひ、さらぬていにもてないて申しけ

るは、「いまはとかくおぼしめすべからず。最後の御有様を御覽ぜむにつけても、たがひの御心のうちかなしかるべし。生をうけさせ給ひてよりこのかた、たのしみさかえ、昔もたぐひすくなし。御門の御外戚にて丞相の位にいたらせ給へり。今生の御栄花一事ものころとなし。いま又かかる御目にあはせ給ふも、先世の宿業なり。世をも人をも恨みおぼしめすべからず。(中略) いかなれば、弥陀如来は、五劫が間思惟して発しがたき願を發しますに、いかなる我等なれば、億々万劫が間、生死に輪廻して、宝の山に入つて手を空しうせん事、恨のなかの恨み、愚かなるなかの口惜しい事に候はずや。ゆめく余念をおぼしめすべからず」とて、戒もたせ奉り、念仏すすめ申す。大臣殿しかるべき善知識かなとおぼしめし、忽ちに妄念翻して、西にむかひ手をあはせ、高声に念仏し給ふところに、橘右馬允公長、太刀をひきそばめて、左のかたより御うしろに立ちまはり、すでにきり奉らんとしければ、大臣殿念仏をとどめて、「右衛門督もすでにか」と宣ひけるこそ哀れなれ。公長うしろへ寄るかと思えしかば、頸はまへにぞ落ちにける。善知識の聖も涙に咽び給ひけり。たけきもののふも、争でかあはれと思はざるべき。ましてかの公長は、平家重代の家人、新中納言のもとに朝夕祇候の侍なり。「さこそ世をへつらふといひながら、無下になさけなかりける者かな」とぞ、みな人慚愧しける。

(平家物語・巻第十一・大臣殿被斬)

傍線部には、十七歳の息子清宗を愛育してきたことを述べ、そして壇ノ浦の合戦で入水する仲間達とともに死ねずに悪評を立てられたのも、清宗への情愛のためであるとしている。また、二重傍線部には自身の処刑直前に念仏を止めて「清宗もすでに処刑されたのか」と語ったとある。西行の和歌の詞書中の「武士の母のことはさることにて、右衛門督のことを思ふにぞとて、

泣き給ひける」という記述とは小異があるが、最期の時まで子への情愛に感わされた宗盛の生き様を示す点では共通している。

ところで「都のうち」に五絃弾中の言葉「籠の中」を掛けたのは、百七十年前に詠まれた高内侍の歌の影響に拠るのである。中関白家、そして平家の嫡流という栄花を極めた家の没落の中で、滅び行く家の子への情愛の最後の燃焼が印象的な二首の「夜の鶴」の和歌を生み出したのである。

鴨長明の『発心集』によれば、子への情愛に感う宗盛に共感と憐れみを投げかける西行もまた、高内侍や宗盛と同じく愛する子を手放さねばならない運命に翻弄された人であった。かれは出家をした際に「幼き女子いとけなの殊になしうしける」者を弟に預けたが、二三年後にわが娘が下賤の子に混じって遊んでいるのを見て不本意に思い、娘の母の血縁者である葉室顕頼の娘の冷泉殿が可愛がつてくれるというのでそこへ移し住ませた。しかし、婿取りをした実の娘の女の子童になっていることを漏れ聞いて、密かに娘に会い出家をさせ、冷泉殿に恨まれた、という。

世の中をすててすてえぬ心地して都はなれぬ我が身なりけり

(山家集・下・一四一七)

という歌を詠む西行とこの説話における西行の人物像は密接に結びつく。いまはの際に宗盛が「武士としての矜持を忘れ(詞書の「武士の母のこと」の「武士の」は「武士が」の意であり、その前に「八島内府」とあるのを「武士」と言い換えたのは、武士でありながら子への思いに惑い、といった世評の有様を示したものと解する)、泣き崩れて子の身の上を案じたという話から西行は『栄花物語』『詞花和歌集』『後葉和歌集』に見える高内侍の歌「夜の鶴都のうちに籠められて子を恋ひつつも鳴きあかす哉」を連想し、「夜の鶴は」の歌を詠んだ。高内侍と宗盛の手放さねばならぬ子への恋慕の思いは、西行にとつても我が身を否応なく呵責する妄執であった。夜、籠の内で子进行

て鳴く親鶴という比喻は、愛し悲しと育んでいた子と隔てられた自己の肉体的な存在の不安とも結びついていたのである。

ところで高内侍の歌から西行の歌まで、二世紀近くの時が経過しており、その間にこの朗詠集の詩を踏まえて子への思いを詠んだ歌は多く存在する。しかし、それは前半の一世紀には見られず、西行の歌をも含む後半の一世紀に集中している。それはなぜであろうか。

四 訴嘆としての「鶴」の和歌表現

長治二年(一一〇五)頃成立の『堀河百首』の鶴題で、大江匡房(一一〇四—一一一一)は次の歌を詠んだ。

沢深きなが子を思ふあしたづは声も心も空にや有るらん

(堀河百首・雑・鶴・一三四六・大江匡房)

不遇な我が子を思う親の上の空の心を詠んだ歌である。初句の「沢深き」について注釈しておく、平安中期の和歌に、沢辺の鶴(殿上を許されない者)が雲居(宮中)を思つて鳴く(泣く)という類型表現が見られる。

女四の御子におくりける

葦たづの沢辺に年はへぬれども心は雲のうへにのみこそ

返し

あしたづの雲居にかかる心あらば世をへて沢に住まずぞあらまし

(後撰和歌集・恋三・七五三・藤原師輔、七五四・勤子内親王)

蔵人にて冠かづぶりたまはりて、いかがおもふと仰せごと侍りければ

年経ぬる雲居離れてあしたづのいかなる沢に住まむとすらん

聞こしめして仰せられ侍りける

あしたづの雲の上にし馴れぬれば沢に住むとも帰らざらめや

(新勅撰和歌集・雑二・二六四・藤原相如、一一六五・円融院)

『新勅撰和歌集』一一六四番歌の「蔵人にて冠たまはりて」とは、「二藁蔵人」のことで、六位の蔵人が叙五位で地下になること(蔵人五位)をいう。

千里・匡衡・嘉言といった歌人を輩出してきた大江氏は藤原摂関政治下では地方国司に任じられる五位の家柄であった。その中で匡房は、大江氏の中では維時(八八八―九六三)以来の公卿となり正二位大蔵卿にまで到り、「高才明敏、文章博覧、無比当世」(永昌記・天永二年十一月五日条)、「天下明鏡」(中右記・天永二年十一月五日条)などと評され、大江氏の再興を実現させた。しかし、匡房には隆兼・維順という二人の男の実子がいるが、いずれも下級官人止まりであった(隆兼は従四位上、維順は正四位下)。康和四年(一一〇三)閏五月四日の長子隆兼の死後、匡房は「九代相伝ノ文書、誰ニカ伝ヘントスルト嘆ジ、子ノ誤ツ事ハナケレドモ、親ニ物ヲ思ハスレバ、敵ナンド申サンモ僻事ニハ有ジ物ヲ」(宝物集)と語ったという。「空にや有るらん」と他人事のように詠んでおり、一般論としての親の子への思いを言っているのは確かだが、このような大江氏の歴史を踏まえれば、家の再興のため次子維順に期待を掛け、上の空の心になっている自身や一族の人々の姿を客観視している部分もあるのだろう。

匡房の曾祖父で、赤染衛門の夫であった匡衡(九五二―一〇二二)が、長徳四年(九九八)十一月一日付の『本朝文粹』巻第七に収められる書状「贈参河守藤原拳直一状一首」において、嫡男拳周(匡房の祖父)について明春の除目の所望を述べる中に、「夜鶴思_レ子之声、欲_レ達天聰」と記していることも大江家の歴史の一齣として匡房の念頭にはあったであろう。赤染衛門は曾孫の匡房が生まれた時、その産着を縫って、

雲の上にのぼらんまでもみてしがな鶴の毛衣年ふとならば

(後拾遺和歌集・賀・四三八)

とお祝いの歌を詠み贈った。匡房の歌の「あしたづ」にはこのような大江家の歴史が織り込まれている。そのような家の歴史と「沢辺の鶴」の類型表現と五絃弾に由来する「子を思ふ」鶴の類型表現とを融合させたところに、家の歴史を背負って宮廷社会に渡りあつてゆくわが子の栄達を願う自身の親心が表現された。そして、そのような親としての述懐を堀河天皇に奉る「鶴」題の歌にひそかに滑り込ませて、恩寵を期待したと見るべきであろう。

子を思う嘆きを詠む際に、抱るべき本歌としては他に、堤中納言こと藤原兼輔(八七七―九三三)の歌、

太政大臣の、左大将にて相撲_{すまひ}の還饗_{かへりあるじ}し侍りける日、中将

にてまかりて、事終りてこれかれまかりあかれけるに、や
むごとなき人二三_{まじし}ばかりとどめて、客人あるじ酒あまた
たびのち、酔ひに乗りて子どものうへなど申しけるつい
でに

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

(後撰和歌集・雑一・二一〇二・藤原兼輔)

がある。兼輔の曾孫に当たる紫式部(九七三?―一〇一六?)は『源氏物語』で再三この歌を引いている。朱雀院が出家に当たり、我が子女三宮のことを案じる場面では、

本性_{ほんじやう}の愚かなるにそへて、子の道の闇にたちまじり、かたくななるさま
にや、とてなかなかよそのことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。

(源氏物語・若菜上)

「世の中を、かへりみすまじう思ひはべりしかど、なほ、まどひさめが
たきものは、子の道の闇になむはべりければ、行ひも懈怠_{けだ}して、もしお
くれ先だつ道の道理のままならで別れなば、やがてこの恨みもやかたみ

に残らむとあぢきなさに、この世のそしりをば知らで、かくものしはべる」と聞こえたまふ。
(源氏物語・柏木)

と引用され、宇治八の宮が出家に当たり、大君・中君の身の上を思いやる場面では、

されば罪の深きにやあらむ。子の道の闇を思ひやるにも、男はいとしも親の心を乱さずやあらむ。女は限りありて、言ふかひなきかたに思ひ捨つべきにも、なほいと心苦しかるべき」など、おほかたのことにつけてのたまへる、(下略)
(源氏物語・椎本)

と引用されている。傍点部には、頑迷、惑い、懈怠、恨み、罪、乱れ、苦といった否定的な言葉が見える。そして、後の本歌取りにおいても、

経家四位して内還昇したりしよろこびに、右兵衛督のいひたりし返事に、院の還昇の事申されよといひて申しつかはしし

君ならでたれの人かはみちびかむ子を思ふ闇にまどふわが身を

返し

武衛

みちびかむ手はおぼえねど子をおもふこころの闇をはれせざらめや

(重家集・三五四、三五五)

今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子のころをよめる

子をおもふ道こそきけばうれしけれ心の闇もさとりはるなり

(長秋詠藻・四五七)

というように、子への情愛を妄執とする宗教的文脈に用いられることが多い。最後の『長秋詠藻』(藤原俊成の家集)の歌では、仏が衆生をすべて我が子と見て慈愛を注ぐことを「子をおもふ道」と捉えている。それはあくまで平等に全ての衆生を救う仏の「子をおもふ道」であり、俗人の「子を思ふ道」がわが子のみへの愛執であり、「心の闇」であることとの対照を意図している。

「子を思ふ鶴」が自身の子への情愛について人々の憐憫を求める対外的表現であるとすれば、「子の道の闇」は子への情愛に囚われる自己を反省し、仏の救いを求める内面的表現として継承されていたのである。

藤原隆信(一一四二—一二〇五)は藤原為経(法名寂超)と藤原親忠女(美福門院加賀)の間の子である。藤原為忠(?—一一三六)とその子の為業(寂念)・為経(寂超)・頼業(寂然)たちの一家は、太秦の常磐に邸を構えていた。そこから三人の子は常磐三寂(別名大原三寂)と呼ばれ、歌道においては若き日の西行や頼政や俊成らを育てたパトロン的位置にある家であった。次に掲げるのは、隆信が宣陽門院(観子内親王)に奉ったと思しい一組の長歌と短歌である。

宣陽門院の御領、尾張の国なりける所を、させる過ちもなきに召されて、三年まで返し給はらざりけるを、いまはさてやみぬべきにこそと思ひ絶えぬる心ちして、さまなども変へて後、このことをよきやうに申せなどいひつけたりし人のもとより、かく世を背きぬと聞こしめして、いとなんあはれに、驚きおぼしめす。その御庄は必ず返し給はるべき由なん御けしき侍るといひ遣はしたれば、その人のもとへよろこびながら、この長歌をよみてなん聞こえける。かつは故院の御影などをも描きとめ参らせて、朝夕の御行ひなどをも、その御前にてせさせ給ふ由聞きければ

かけまくも かしこき御世に 仕へつつ 年へにし身は とまりぬて 空しきあとに 尽きもせず かくる心は 深き海 高き山とも 仰ぎこし 藐姑射の山の 面影を いまも名残の 君が世の 万代までの 形見とて 描きとどめてし 水茎の 跡のしるしは 見えねども 猶た ちいでて 老いの波 吹飯の浦に 衰へて ゆき隠れなん あとまでも

君が八千代に 仕へよと 思ふあまりに 鶴の子の 玄孫までも 教へ
おく 心のうちは 石清水 賀茂の河波 底清し いまは我が身の 尾
張なる あはれをかけば 墨染の 袂も狭き うれしさを 身にあまる
まで 包みてしかな

老いの浪たちかくるとも和歌の浦のあしたづの子をかたみとは見よ

(隆信集・九三九、九四〇)

「宣陽門院の御領、尾張の国なりける所」とは、建久三年(一一九二)の後白河法皇の崩御に先立って、法皇の寵愛を受けていた宣陽門院が譲渡された七十五箇所の膨大な莊園群である長講堂領を指す。隆信の家は本所である宣陽門院の補任を受けて在地を統括する預所を担っていたのであろう。しかし、この預所を後鳥羽院に召し上げられたことは、家の浮沈に関わる一大事であった。「このことをよきやうに申せ」と隆信が家人に託した訴えの相手は、本所の宣陽門院であろう。それに対する色よい回答があつたため、その喜びとともに、自身のかねてからの念願を歌つた長歌と短歌を贈つたのである。長歌では、自身を子への愛情の篤い鶴にたとえ、自分が出家隠遁した後「鶴の子の玄孫までも」君の御代に仕えられるよう石清水や賀茂の神に祈る思いを表し、短歌では老いの浪が打ち寄せて我が身がこの世から姿を消すとしても、和歌の浦の蘆辺の鶴の子のような私の子を、私をしのぶよすがとして御覧下さい、と歌う。「子」には五絃弾の「夜の鶴子を憶うて籠の中に鳴く」への連想から「籠」が響き、その縁語で「かたみ」には「筐」が掛かる。「鶴の子の 玄孫までも教へおく」「和歌の浦のあしたづの子をかたみとは見よ」とある「鶴の子」とは家を継ぐ自身の子孫(歌人に、信実、猷円、順徳院兵衛内侍、土御門院少将内侍らがいる)を指すと見られる。自身の子を「鶴の子」とする表現を、かつて隆信は永暦元年(一一六〇)母と自身が仕えていた美福門院得子が亡くなった後に詠んだ、

母のかの服着られし日、やがて我が身もとりわき志深くて
同じく深き色を染むるに、又子にて侍る猷円も、同じ筋に
曾孫まで染め侍りて、その他又そむるたぐひもなかりしあ
はれさも思ひつづけられて

かなしさは又たぐひなき鶴の子のただ一筋にそむる毛衣

(隆信集・哀傷・三九四)

という歌に用いている。「かなしさ」には美福門院を悼む「悲しさ」と、我が子孫を愛する「愛しさ」が掛けられているのであろう。また、「一筋」とは自身の子猷円とその子孫たちのことを指す。隆信は八歳にして美福門院の藏人になり、十三歳でその皇女猷子内親王の御給で叙爵を受けるなど、美福門院方の近臣であつた。女院の死は我が子の将来と家の行く末に一抹の影を落としたに違いない。

藤原家隆(一一五八—一二三七)は藤原俊成に和歌を学び、藤原定家と新古今時代の双璧を成し、建保四年(一二二六)五十九歳にして従三位に叙され公卿となり、従二位を極位とした。兄雅隆の娘との間に嫡男隆祐(一一八一—一九〇頃出生、一二五一生存)を儲け、隆祐は後鳥羽院のもとで歌道に精進した。

後堀川院御時、家隆卿隆祐朝臣を侍従に申しなすべきよ

し申すとて、年をへて霜のしたなるあしたづの子を思ふ
ねに春をしらせよ、と読みて侍りけるをそのよし奏し侍
りけるに、許さるべき様の御気色なりければ、かへりご
とに

あはれとは雲井をかけて聞こゆなりあしべのたづの子を思ふ声

(玉葉和歌集・雜三・二二八〇・西園寺実氏)

隆祐は正治二年(一二〇〇)すでに侍従となっている(院当座歌合正治二

年一〇月)ので、後堀河院時代(一二二二—一二三三)、つまり四十路にかかる頃に侍従となつたとする『玉葉和歌集』の記述は不審である。あるいは『明月記』寛喜元年(一二二九)四月四日条に、「付有長朝臣、申前宮内卿申子息^(降祐)「侍従」一階事」とある記事の誤読であらうか。しかし、その後も侍従のまま昇進せず、極位は従四位下であつた。その嫡男のために家隆は詞書中の傍線部の歌を詠んだ。「霜のしたなる蘆」から「蘆鶴」と言い掛け、老齢で長年不遇を託ってきた自己をたとえている。「子を思ふね」は、五絃弾を踏まえる。それに対して任侍従の勅許が下り、家隆の子を思う訴嘆の声が帝のもとへ届いたとの実氏の返歌があつた。実際には後鳥羽院時代の話であつたものを、「年をへて霜のしたなるあしたづ」という言葉をより劇的に響かせるために後人が改変した可能性も考えられよう。

このような蘆鶴の歌による歌徳譚には俊成(一一一四—一二〇四)・定家(一二二二—一二四二)父子の前例がある。

今上御時五節のほど、侍従定家過ちあるさまに聞こしめすことありて、殿上除かれて侍りける。その年も暮れにける又の年弥生のついたち頃、院に御けしき賜るべきよし、左少弁定長がもとに申し侍りけるに、そへて侍りける

皇太后宮大夫俊成

あしたづの雲ちまよひし年くれて霞をさへやへだてはつべき

このよしを奏し申し侍りければ、いとかしこくあはれがらせおはしまして、いまははや還昇仰せくだすべきよし御気色ありて、心晴るる由の返事仰せつかはせと仰せ下されければ、よみてつかはしける 藤原定長朝臣

あしたづは霞をわけてかへるなりまよひし雲ちけふや晴るらん
この道の御あはれみ、むかしの聖代にもことならずとな

ん、時の人申し侍りける

(千載和歌集・雑中・一一五八、一一五九)
定家の「過ち」とは、文治元年(一一八五)十一月二五日、二十四歳の侍従時代に、宮中の新嘗祭の場で少将源雅行に侮辱されて殴りかかった事件を言う。老父俊成は後白河院の許しを請うため、申文^{もうしごみ}を認め、その巻末に添えて歌を奉った。ここには子を思うという言葉は直接出てこないが、院の心を動かした「この道の御あはれみ」とは道長の玄孫にあたる俊成が家の危機に際し、和歌を通して子に篤い情愛を注ぎ、和歌の道にかけて家を再興しようとしている姿への共感であつた。

定家の第二番目の百首歌と思しい「養和百首」は、これに先立つ寿永二年(一一八二)、定家二十一歳の時に詠まれたものである。その劈頭には、次のような真名の序文が付されている。

養和百首披露之後、猶可詠堀河院題之由、有嚴訓。仍寿永元年又詠此歌、今見之一首無可采用之歌。仍漏歌了。而倩案之、当初詠出此歌時、父母忽落感涙、将来可長此道之由、被放返抄降信朝臣寂蓮等、面々吐賞翫之詞。右大臣(後法性寺殿也)殿故有称美御消息、俊恵来拭饗応之涙、時之人望以之為始。依思此往事、更書加此奥殊有赭面之思。
但件人望僅三四年歟。自文治建久以来、称新儀非抛達磨歌、為天下貴賤被悪、已欲被棄置。及正治建仁、蒙天満天神涙助、応聖主聖朝之勅愛。僅継家跡、猶携此道事、秘而不洩。

傍線部には家跡を継ぐ者として歩んできた青年定家の忸怩たる思いが表明されている。当該百首の堀河百首題の「鶴」題に当たる歌は、

あしたづのこれにつけてもねをぞなく吹きたえぬべき和歌のうら風

(拾遺愚草員外・雑・七五五)

である。「あしたづの籠」から「これ」を言い掛け、さらに「これ」には俊

成の子としての自称「子」が掛けられており、「あしたづ」は自身に期待を掛け、それゆえに深い嘆きも抱いてきた父俊成のことを指すであろう。

また後に定家は任務のため九条に外泊せざるを得なかった時、五歳の我が子三名（為家の幼名）のことを思い、「夜鶴之思難^レ禁」と『明月記』に記している（建仁二年五月二六日条）。

俊成に始まる御子左家とその子孫は院政期以降歌道の枢軸をなしてゆくが、定家の異父兄隆信も含め、御子左家とその近親者の歌に「鶴」の和歌表現が多いことは注目される。

定家の嫡男藤原為家（一一九八—一二七五）は、寛元元年（一二四三）の『新撰和歌六帖』の「鶴」題で、

籠にこもるわが身もしらず夜の鶴心の闇のねこそなかるれ

（新撰和歌六帖・第六帖・つる・二五六七・藤原為家）

という歌を詠んだ。当時為家には、正室宇都宮頼綱女との間に為氏・為教・為顕の三人の男子がいた。前掲の兼輔の「人の親の」の歌と、五絃弾とを組み合わせるという珍しい形で、自身の子を思う心の闇の深さを歌う。二年前の父定家の死後、為家は権大納言を辞し復任しなかった。また、前年には自ら近侍していた順徳院が、四年前には後鳥羽院が崩御し、父も含め次々と歌界の巨星が落ちていった事態もあり、歌の家の存続に対する危機感が、この歌の「心の闇」という言葉には込められているのだろう。

為家の晩年にその側室となった阿仏尼（一二二二？—一二八三）は、為家の死後『四条局假名諷誦』という追悼文を記している。その中に、五絃弾を引いて、父に先立たれた為相・為守の二子に寄せる思いを記す箇所がある。

果無^{はかな}き世に、遅れ先立たば、必ず生れむ處を告知らせむと、諸共に誓ひしこと、歎きに余る涙の床は、解けて寝^ぬる夜無ければ、定かなる夢をだに見ず。現に留^{とどま}る名残としては、何に忍ぶのと、一つにもあらぬ忘れ形

見にも、夜の鶴の籠の中の声絶えず。

阿仏尼の『十六夜日記』は、為家の死後、播磨国細川荘と相伝の和歌文書の相続をめぐり、正室の子の為氏と争い、弘安二年（一二七九）に鎌倉へ下向した際の旅日記と、鎌倉滞在中に京の人々と交わした消息文から構成される。その後半部分の掉尾を飾る長歌と短歌のうちの長歌に、次のような一節がある。

それが中にも 名をとめて 三代までつぎし 人の子の 親のとりわき
譲りてし そのまことさへ ありながら 思へばいやし 信濃なる そ
のはき木の そのほらに 種をまきたる とがとてや 世にもつかへ
よ いけるよの 身をたすけよと ちぎりおく 須磨と明石の つづき
なる 細川山の 山川^{やまがは}の わづかに命 かけひとて つたひし水の 水
上も せきとめられて いまはただ 陸^{くみ}にあがれる 魚^{いさ}のごと 梶^{かぢ}緒絶
えたる 舟のごと よるかたもなく わびはつる 子を思ふとて 夜の
鶴 なくなく都 いでしかど 身は数ならず 鎌倉の 世のまつりごと
しげければ 聞こえあげてし 言の葉も 枝にこもりて 梅^{うめ}の花 四年^{よとせ}
の春に なりにけり （十六夜日記・異本歌）

傍線部が五絃弾を踏まえた箇所である。このように御子左家を継ぐ家の正統性をめぐる争いはその後裁判沙汰になり、京極家（為教祖）・冷泉家（為相祖）・二条家（為家祖、為氏継承）の分立へと繋がった。阿仏尼は裁判の結果を得られぬまま、弘安六年におそらく鎌倉で没した。

阿仏尼には『夜の鶴』（別名、阿仏口伝、夜鶴抄、四条口伝、阿仏秘抄）という歌学書がある。ある貴人（女性か）の求めに応じて書かれ、献上後に子冷泉が相に授与したと見られる。そうした経緯から『夜の鶴』や『夜鶴抄』という書名は後人が付けた可能性もあるが、いずれにせよ阿仏尼は高い教養の持ち主でありながら、家のため、子のために我が身を擲^{なげ}つ母という点で、

高内侍にも類する性格を持っており、それがこの書名に繋がったと見る事ができよう。しかし、子への情愛の表現には定型文的な要素が濃厚で、高内侍の狂気に近い劇的な要素は阿仏尼からは感じ取れない。

五 おわりに

「鶴」の和歌表現は、親子の情愛の表現としての「夜の鶴」「鶴の子」、述懐の表現としての「沢辺の鶴」「蘆鶴」が互いに融合しながら、宮廷社会における子の栄達や家の再興を願う親心、そしてまた家跡を継ぐ者としての子の自覚を対外的に表明する役割をも果たした。各種の「鶴」の和歌表現の融合を促したものとしては、院政期の社会における家意識の変質が挙げられるだろう。女子を入内させ、天皇の外戚になることが主たる権威の源泉であった時代が終わり、それぞれの家が何か一つの体系化された学問や諸芸の「道」を持ち、そうした文化事業を子々孫々へと伝授してゆくことが求められる時代になったのである。

摂関家の弱体化とともに、家々は各分野で自分たちの独自性を主張しなければならぬ時代となった。伊周ら中関白家と道長ら御堂流の対立においても、宮中での政治的地盤を固める上で「文化」が活用されたことは贅言を要すまい。道長を超える政治家に伊周を育てられなかった高内侍の悲劇は、院政期以降には日常的に繰り返される一般的な悲劇になったのであろう。

*和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。その他の本文の引用元は以下の通り。『和漢朗詠集』…川口久雄『和漢朗詠集全訳注』（講談社学術文庫）、『栄花物語』…松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系 栄花物語』（岩波書店）、『平家物語』…市古貞次校注『日本古典文学全集 平家物語』（小

学館）、『源氏物語』…『日本文学web図書館』『平安文学ライブラリー』校訂本文（古典ライブラリー、二〇一五年）、『本朝文粹』…『新日本古典文学大系 本朝文粹』（岩波書店）、『明月記』…稲村榮一『訓注明月記』（今井書店、二〇〇四年）、『四条局仮名諷誦』…築瀬一雄編『校註阿仏尼全集増補版』（風間書房、一九五八年初版・一九八四年増補再版）。但し、私意に表記を改めた箇所がある。

註

1 清宗の母で、宗盛の妻である平清子とする説もあるが、清子は治承二年（一一七八）に七月一六日に急逝しており、父子の処刑はその七年後の元暦二年（一一八五）六月二日であるから年代が合わない。久保田淳『山家集入門』（有斐閣、一九七八年）参照。

2 ここでの隆信の家意識は、「和歌の浦」とあることから歌道と強く結びついており、父為経の常磐家、父の出家に伴い離縁した母親忠女が再婚した相手である俊成の御子左家とが可能性として考えられる。しかし、詞書中にある「いまはさてやみぬべきにこそと思ひ絶えぬる心ちして」という出家の理由は莊園の経済を基盤とする家の意識に根ざしており、また御子左家とは離縁した母を通しての繋がりに過ぎない。

木村 尚志（和洋女子大学 人文社会科学系 助教）

（平成二十八年十月十一日受理）